

日中文化交流に携わって半世紀

日本中国文化交流協会

専務理事 中野 暁

今年、日中文化交流協会は創立 65 周年を迎えた。当協会の誕生は 1956 年 3 月 23 日、新中国成立後 7 年目の年であった、日本では前年に自由民主党が発足、いわゆる「五五年体制」がスタート、対ソ国交回復が実現し中国との国交回復への期待も高まった時期であった。日中間にはすでに日本中国友好協会（1950 年）や日本国際貿易促進協会（1954 年）が先行して成立していた。周恩来総理、廖承志といった中国側首脳は、両国関係を一層深め、国交正常化への機運を高めるため、日本の広範な文化界を結集した組織の必要性を願っていた。

1955 年に片山哲元首相や演出家の千田是也らが北京を訪問した際に、日中文化交流協会創立についての「申し合わせ」が行なわれた。中国側署名者は趙毅敏、陽翰笙、老舍、歐陽予倩、馬思聰、劉開渠、蔡楚生らの諸氏であった。その熱い思いを受け取った千田は帰国後、わが国文化各界人士に働きかけ、フランス文学者で評論家の中島健蔵を理事長とした日中文化交流協会が創立された。中島健蔵はまさに当時の日本文化界、言論界の中心にいた文化人だった。往来は香港を経由しての時代だったが、交流の必要性を願う両国文化人の交流が始まった。

創立当初、会員 80 名余りでスタートし、協会の設立趣旨に賛同する会員の会費を基礎として運営してきた当協会のような民間団体が今日まで 65 年も続いているのは稀有なことと言える。日本人の根底には、2000 年にわたる交流によって日本文化の骨格を与えてくれた中国に対して尊敬と感謝の気持を抱くと同時に、ある時期、その“文化の母国”ともいう国を侵略し、計り知れない損害を与えた事実を認識し、それによる亀裂の克服こそが大切という考えがあったからである。それ故にこそ、中国との文化交流を標榜する当協会に対し、多くの方が、まさに“無償”ともいえる支援をしてくださっているのだ、と考えている。

協会創立以来 65 年の中で、歴史認識や尖閣諸島領有権問題によって交流に大きな影響が及んだ時期が幾度かあった。バブル崩壊で日本経済が疲弊し多くの法人、個人の会員が減少した時もあった。その幾度かの困難や障害を乗り越えてこられたのは、中島健蔵、井上靖、團伊玖磨、辻井喬、そして現在の黒井千次といった歴代会長の指導、そして文化各分野における先達の骨身を惜

しまぬ努力、さらに中国各方面の方々の支持や支援があったからにはほかならない。敬意と感謝の気持で一杯である。

私が日中文化交流協会の事務局で仕事を始めたのは1973年、日中国交正常化が実現した翌年であった。大学で美術教育を専攻し、クラブ活動でヨット競技に夢中になっていた私には、中国の政治、経済、歴史などの知識や理解もなく、中国語も話せなかった。そんな人間が、中国との文化交流に参画し、以後半世紀近く仕事をするようになるとは、思いもよらぬ人生の不可思議と感じている。以来、私の訪中は200回をはるかに超えているが、最も訪問が多い都市が上海である。文化交流の醍醐味は「異文化に触れ、その歴史、習慣、人情を実感し、友情や愛情を育む」ことであると思っている。その視点から、様々な分野の人々との旅は、数えきれない思い出がある。その中から上海における3つの交流を紹介したい。

① 初訪中は大相撲

1973年4月、日中国交正常化慶祝行事の一環として大相撲訪中が実現した。協会事務局に入って1カ月ほどの私が初めて訪中したのが、日本相撲訪中団に秘書として随行した旅であった。一行は武蔵川喜偉日本相撲協会理事長を団長に、北の富士、琴桜両横綱ら117名という大型訪中団だった。

北京では周恩来総理、郭沫若といった要人が工人体育場に来られ、厳粛な雰囲気の中、土俵上で相撲が披露された。歓迎会で相撲のルーツである力士が描かれた漢代壁画模写作品が贈られ、交流の原点に思いを馳せた。続く上海では、今は無くなっている風雨体育館で行なわれたが、ここでも満員の観客から大歓迎を受けた。北京でも上海でも観客は基本的に男性だけだった。豊満な体の力士が“禪”を身に着けただけで土俵に上がる姿が女性には刺激的すぎることだった。相撲興行のほか、“髻”を結った礼儀正しい力士たちは、学校、少年宮、人民公社、工場を参観、名所旧跡を遊覧したが、各地各所で大歓迎を受け、友好の実を上げた。相撲界の行司は審判員、呼び出しは進行役が仕事だが、土俵を降りれば行司が旅のツアーリーダー、呼び出しは土俵づくりや雑事をされていることを私自身初めて知った。大相撲は、1年中全国各地を巡業しているので、昔から役割分担しているとのことであった。行司も呼び出しも、中国側接待員から皆「先生」と呼ばれ、みな感激していたのを記憶している。上海側の接待は、上海市人民対外友好協会と上海市体育総会であった。当時、上海の街並みは高速道路などなく、プラタナスに覆われていて隔世の感がある。初訪中が大相撲の訪中だったことで、異文化交流の醍醐味を初めて実感した忘れ難い旅となった。

② 経済界人士の文化交流

経済界人士は、中国企業との取引や経済フォーラム参加などで数多く訪中している。でもほとんどの訪中が1~2泊、仕事以外は、せいぜい当地の名所を参観し当地の美食を味わって帰国するのが常だ。1980年代後半から、中国と長く深く付き合うには、歴史や文化への理解が不可欠と考える人が増えてきた。日本経済新聞社や経済同友会の指導者である。当協会は、この交流に協力し、経済人による1~2週間にわたる友好交流を行ない大きな成果を収めた。中でも、日本経済界訪中団は敦煌訪問を中心に、上海や北京などを訪ね、悠久な歴史を体感し、併せて現代都市の現況を視察する旅が今日まで続いている。日本経済新聞社の圓城寺次郎社長の発案で始まった交流で、経済界の重鎮に呼びかけ、毎年10~30名が参加している。私もこの10年間、毎年同行しているが、上海ではいつも上海市人民対外友好協会の指導者が、時宜にあった説明をしてくださっている。参加した経済人は皆、「中国への理解が深まり歴史への敬意を抱いた」と、文化交流ルートの旅を喜んでくださっている。

③ 栗原小巻副会長との訪中

栗原小巻は、高倉健、中野良子とともに、“コマキスト”という言葉が流行したように、中国でもファンの多い俳優である。映画イベント以外に、日中文化交流協会副会長を務めてくださっている栗原は、協会代表団で度々訪中している。2016年もそうであった。揚州での「東山魁夷石版画展」などの行事に参加した後、上海を訪問、景瑩副会長をはじめとする皆様の歓迎を受けた。さらに、この招待宴会には中国の著名な声優で、栗原が主演した映画「愛と死」などの吹き替えを担当した劉広寧女史が参加され、再会を喜び合った。そんな感激的な瞬間に同席できたことも、訪中の醍醐味だ。中国の友人たちは、改革開放政策が始まってから上映された高倉健や栗原小巻の映画が、如何に中国人を夢中にさせ、世界へ眼を開いていったかを語ってくれる。

上海訪問の3つの思い出を挙げたが、ほかにも、文学、演劇、音楽、美術、書道、曲芸、科学、医学、囲碁、仏教などの分野に参加した双方の人々の表情が思い出される。

新たな困難を乗り越えて

創立以来65年の歳月が平坦な歩みではなかったことは前述した。現在は、これまでとは全く質の異なった困難に直面している。世界中を席卷しているコロナ禍である。昨年2020年を通じて、代表団の往来、展覧会、演奏会などの事業は、ほぼ全面的に延期、中止となった。国際間の往来が閉ざされ、国内

できえ人と人が触れ合うことが規制される異様な状況に、未だに収束の目途がたっていない。

文化の交流とは、まさに人と人が集い合う「三密」の上に成り立ってきた。同じ空間の中で、同じ空気を吸いながら思いの丈を語り合い、喜怒哀楽を共有することで友情が芽生えた。互いの国を訪れ、その地の歴史風土に触れ、そこに住む人々の人情に接してきた。当協会が2015年から始めた大学生訪中に見られたように、若い世代が直接交流することによって、互いにマスコミ報道による既存のイメージを払拭し、相互理解を深め、友情を育むという交流の成果を生み出した。だが、今は「三密」が避けられ、各分野で密を避けるオンライン化が推奨されている。当協会も昨年来、オンライン交流にも取り組んではいるが、人と対面できないことによる「交流の限界」も実感しているのが実状だ。

来年2022年は日中国交正常化50周年という節目の年にあたる。わが協会も各種の記念行事を実現すべく、関係団体と協議を進めている。国家間の往来が再開した際には、交流の内容をより豊かにできるよう準備をしていきたい。それが協会を支えてくれる両国の方々の願いだと肝に銘じたい。

写真1：日中文化交流協会栗原小巻副会長（中）、中野暁専務理事（左）が中国大使館を訪問。協会で募集した新型コロナウイルス救援金を孔鉉佑大使（右）へ手渡した。2020年3月6日 中国大使館

写真2：大相撲訪中より。中国へ向かう特別機に乗り込む力士ら。右上方のスーツ姿の青年（右4）が筆者。

写真3：日中国交正常化記念の慶祝行事「大相撲中国場所」は、日本相撲協会と日中文化交流協会が実施したもの。力士は総勢117名、北京と上海で6回挙行した。1973年4月13日 上海

写真4：日本経済新聞社は、1980年代から敦煌研究院への支援を続けている。同研究院の李萍文化宣伝部部長、敦煌石窟保護研究基金会の楊秀清理事長をはじめ、日本経済新聞社の支援で日本に留学した研究員、解説員とともに、写真に臨む日本経済界訪中団の喜多恒雄団長（前列左6、日経会長）、平田保雄顧問（前列左4、日経元会長）ら。2019年9月5日 敦煌

写真5：栗原小巻副会長（右3）は、上海市人民体外友好協会が主催した歓迎会で、映画「愛と死」で栗原氏の配役の吹き替えを担当した著名な声優劉広寧氏と久方ぶりに再会した。2016年10月